

特集

子どもと祭り

ドイツ

キンダーガルテンでのお祭り

ベルガー有希子

ドイツ語で、お祭りは、フェスト(Fest)と言います。

一年を通して、キンダーガルテン(幼稚園)では、さまざまなフェストを子どもたちと楽しみます。

春を迎える喜びいつばいのイースターのお祭り、夏には親子で楽しむサマーフェスト、秋には収穫祭、ハロウィーン、提灯祭り、冬にはクリスマスにちなんだフェストいろいろ、そして、二月には仮装を楽しむカーニバルがあります。

今回は、十月号ということもあり、収穫祭、提灯祭りを中心にお伝えしたいと思います。

収穫祭

ドイツ、バイエルン州の幼稚園は、九月が年度始め。クラスは、縦割りの二十五名が一般的です。異年齢児保育なので、その年その年によって、学校にあがる子どもの人数により、新入園児の数も変動があります。時には、半数の十二名が進学すること



も。そうすると、九月いっぱいには、たくさんの子三歳児を迎えることとなり、園の中は、少しざわついた状態です。

そんな中、新しいクラス編成をもって迎える最初のフェストは収穫祭です。ドイツの園でのお祭りは一日だけのフェストではなく、お祭り週間、というような感じなので、毎日収穫祭についてのテーマの保育が繰り返し行われます。

まず、子どもたちは家庭から野菜やくだものを持ってきます。りんご、梨、じゃがいも、ブラムなど。その色や、においや感触をみんなで確かめて、名前を確かめて、そのくだものがでてくる歌や手遊びへとつながっていきます。

毎年歌うスタンダードな歌がいくつかあるのですが、子どもたちは一年間歌っていなかったにもかかわらず、すぐに思い出して口ずさみます。入園したばかりの子三歳児も、うれしそうに自分の持ってきた

くだものを握りしめながら身体を揺らしています。そして、秋になってたくさんのかだものができてうれしいな、ありがたいな、という子どもの気持ちを膨らませていくようです。

ある日は、三歳児とくだものの貼り絵をしたり、ある日は、五歳児中心にりんごケーキを焼いたり、ある日は、粘土が好きな子どもたちを誘って、いろいろな野菜を作ってみたり。収穫祭がテーマの設定保育をしますが、みんな一緒にする保育は短時間で集合力を要するものや、工作などについては、少数で希望者を集めて活動することが多くなります。

これは、クラスに二人以上の担任がいること、それから、クラスを越えた保育活動も実施されているというドイツ幼稚園の背景の中でこそ、実現できる保育の形だと思います。

保育内容について、特に日本と違うと思うのは、子どもと一緒に料理が、保育の中に溶け込んでいる

ことです。収穫祭に関することだけでも、ケーキを作るほかに、かぼちゃスープやフルーツサラダ、コンスープ、くだものの型抜きを使ったクッキー作りなど、たくさんアイデアがあります。

中でも、私が「さすがドイツ」と思ったのは、子どもたちと一緒にパン作り。「パンは、小麦からできているんだよ」という説明から始まって、こねるところから、イースト菌を入れてねかせておいて、一日がかりで焼き上げます。この活動は、全員が何かしらかわりをもちました。三歳児は、こねる時に参加して、年長児は、パンを形成する時に活躍しました。パンが焼ける時に、ずっと番をしている子もいます。パンの焼けるにおいは、園全体をなんんだか幸せな気分にします。できあがったパンを前にしてみんな大興奮。早く食べたくて、うずうずしています。

食事の前には、みんなで小麦をもたしらしてくれる

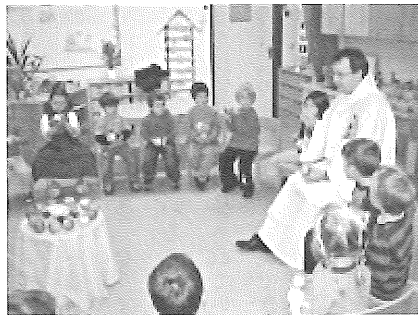
大自然に想いを
はせます。日本
では「お百姓さ
ん、お父さん、

お母さんありが
とう」、と食べ
物を作ってくれ

る人に対する感
謝を言葉に表し

ますが、ここドイツでは偉大なる自然に対して、そして、大切な地球に感謝をします。私が勤めている園は公立なので、神という言葉は保育の中で出てくることはあまりありませんが、これが教会立の幼稚園の場合には、神様に感謝をささげる、ということになるでしょう。

幼児には、まだ、抽象的過ぎてわかりにくいのでは、と思っていました。それは、私の思い違いで



▲収穫祭（息子の幼稚園での写真。教会系のため、牧師が写っている）

した。幼児は幼児なりに、感覚として小さいころから、自然や神に対する畏敬の念を育てていくようです。日本人が、保育や日々の生活の中で、儒教的考え方を身につけると同じように、ドイツでは、キリスト教の教えが子どもの時からの生活に根ざしています。

こうして食べ物をもたらしてくれる大地の恵みに感謝しながら、自分たちで作ったパンをみんなと一緒にいただくのは、何にも増してのごちそうとなります。

提灯祭り

十月も下旬になると、だんだん気温が下がり、日が暮れるのが目に見えて早くなります。またサマータムの終了もあって、フェスト当日十一月十一日は、五時すぎには暗くなるので、提灯祭りにはもってこいです。この提灯祭りは、中央ヨーロッパに昔

から伝わるお祭りで、実在する聖マーティンという聖職者の善行が言い伝えられています。

その言い伝えのあらすじは次のようなものです。

ある寒い日、マーティンが馬に乗っていると、貧しい人が道端で震えていました。その人が、助けを請うと、マーティンは、自分の着ているマントの半分を分け与えます。貧しい人が、マントのお礼を言おうとすると、マーティンは立ち去ってもういませんでした。

このお話から、みんなで分かち合うことや、貧しい人、困っている人がいたら、手を差し伸べることが、子どもたちにさりげなく伝えられます。

マーティンが主役となる行列に使う提灯を作ることは、園の例年の課題です。毎年、工夫を凝らした提灯ができるのでとても楽しみです。子どもたちと話し合いをもって、これが作りたい、という希望があればできるだけとり入れるようにしています。

去年、こんなことがありました。入園したばかりの三歳児のアレックスは、五歳児が中心となつて

作っている難易度の高い提灯をどうしても作ってみたいと主張しました。この子の兄がこのクラスにいるので、兄と同じものがいい、という想いもあったのだと思います。それは、風船を膨らませて、その上から細かく切ったセロハン紙を何重にも重ねていき、乾いてから風船を取り除くというものでした。それから、手や足を付けて動物の形に仕上げます。

私は、「でも、この提灯は、時間がかかるし、上手に貼らないと手がべたべたになるから、ブラシの方にしようよ」と誘いました。

もう一つのグループは、落ち葉を拾ってきて、その落ち葉をトレーシングペーパー様の透けて見える紙の上に置き、絵の具のついたブラシを使って金網の上からブラッシングしています。すると、落ち葉の形だけを残してきれいな細やかな色がつきます。

これは簡単な作業なので、三歳児が作っても、できあがりきれいです。

でも、アレックスはどうしても、時間のかかる提灯の方がいいと言い張り、年長児たちと一緒に輪に入って、作り始めました。アレックスは、初めは夢中で紙を貼っていましたが、途中であきてしまったのか、ペースが落ちてきます。そして、とうとう筆を放り投げてしまいました。

「アレックス、時間がかかるね。あした続きをしようか？」と言うと、目を輝かせて、そういう手があつたか、と思つたようでした。

それから、年長児が、一日で貼り終えた提灯を、アレックスは、四日かけて完成させたのです。

この時、アレックスはきつと自分で選んだことに對する責任について、アレックスなりに感じることでできたのではないかな、と思いました。そして、もちろん「やったー」という達成感も。私自身も、



▲提灯祭り

アレックスのやりたいという意欲の力強さに感心し、保育者として、彼の意思をねじ曲げることがなかったことに、ほっとしたのです。

さて、クライマックスの行列。暗くなったところに、提灯のろうそくに火をともし、お母さんやお父さんと一緒に子どもたちが集まってきました。馬に乗った聖マーティンが現れると、馬を先頭に幼稚園の周りの歩きやすい道を、二十分ほど歌を歌いなが

ら練り歩きます。

園に戻ってきた

ら、マーティンに

ついての小さな劇

があります。

劇の中でマント

を剣でさっそうと

半分に切って分け

与える騎士マー

ティンは、子どもたち、特に男の子にとっては憧れの的のようで、この時期、園では騎士ごっこがやり、みんながマーティンになりました。

劇が終わると、保護者が用意してくれた温かいフルーツパンチとクッキーが子どもたちに振る舞われます。クッキーは、一人に一つずつ配られ、「マーティンさんのように、お父さんやお母さんにも分けてあげてくださいね」と呼びかけられます。子どもが小さい手で、クッキーを割って、大人たちに渡しているのを見るとなんだかあたたかい気持ちになります。

ドイツの秋のフェストを二つご紹介しましたが、どちらも、キンダーガルテンの保育の中で、行事というほどの仰々しさはなくとも、子どもたち、保育者、そして保護者にとっての大切なアクセントとなっていることは、間違いないと思われます。

(ドイツ在住 ロバート・ペーカー通り幼稚園)